生きていく上で欠かすことができない「食」を未来につなぐ、私たちのまちの新規就農者や農業後継者などを紹介します。

霧島の農業をミライへ

次世代農家探訪

vol. 10

竹一農園

竹ノ内 賢一郎さん(50) 隼人町出身、隼人町在住。
就農13年目。竹一農園代表。霧島NEO-FARMERS!(ネオファーマーズ)役員。
営農類型：露地野菜
経営作目：根菜類（ショウガ、ダイコン）　営農面積：2ha

霧島NEO-FARMERS!(ネオファーマーズ)の情報はこちら

Facebook　インスタグラム

秋空の下で畑を覆いつくす特徴的な緑の葉。鹿児島空港に近い隼人町西光寺で、ショウガの生産に精を出すのが、竹ノ内賢一郎さん(50)です。

竹ノ内さんが就農したのは37歳の時。国分実業高校（現・国分中央高校）園芸工学科を卒業後、建設会社に就職し、全国各地の災害防止工事に携わりましたが、農家の一人息子だった竹ノ内さんは、両親が元気なうちに家業を継ごうと思い立ち、帰郷しました。

「就農1年目は思ったより順調でしたが、その後は輸入野菜やコロナなどの影響で取引が減少。苦労して作っても買い叩かれ、農家をやめようと思ったことさえありました。続けてこられたのはお客さまや農家仲間、協力者のおかげ。自分が苦しい時は周りも一緒なんだと思うと頑張れます」と竹ノ内さんは力強く話します。

収穫体験も受け入れており、県外から訪れる人もいるそう。「畑の中で一緒に収穫作業をしながら、いろいろな話をするのが楽しいですね」

自慢のショウガで作る・霧島ジンジャー

竹ノ内さんはショウガそのものの生産販売だけではなく、ショウガを使ったシロップ・霧島ジンジャーの開発に取り組んでいます。「ショウガは体を温める成分を多く含んでいるので、寒くなるこれからの季節にぴったりです。1人でも多くの人に購入してもらい、霧島市のショウガという地域資源の認知度向上にもつなげたい」と竹ノ内さんは意気込みます。霧島ジンジャーは、12月中旬から日当山西郷どん村で販売予定。詳細はインスタグラムをご覧ください。

竹一農園のインスタグラムはこちら